

「遺族・館野義雄さんの挨拶」(墜落五十周年慰霊市民の集いにて)

ただ今ご紹介されました館野義雄と申します。

本日は事故後五十周年慰霊市民の集いに参加いただきありがとうございます。

今日は当時の事故のひどさが、いかに悲惨なものであったかを記憶をたどりながら、また、父の話や母などがその場で見たことをお話しいたします。



涙ながらに、事故当時のことを話してくださった館野義雄さん

まず、私には3人の兄、2人の姉、それと両親の8人家族で東京の大田区で町工場を営んでおりましたが、昭和36年2月下旬ごろこの地に工場拡張のため移転してきました。

工場には鉄を切る機械2台や、エヤーハンマーと云う畳二畳ぐらいの広さで高さ2.5mぐらいものが設置されていました。

昭和39年9月8日(火曜日)米軍機が工場に墜落し兄たち従業員五人の命を奪いました。

事故当日、私は中学校に通学していたのですが何故か学校に行きたくなく途中で家に引き返しましたが、学校を休むわけにもいかず、光が丘中学に向かいました。

事故の時刻、体育の授業でバレーボールをしていましたが、家の方角から大きな爆発音がドカーンと2回したのでおもしろい音の方角

に顔が向き一瞬自分の家ではないかと感じました。しかしその思いを否定し、数分後に授業が終わり校舎に戻ると、小学生の時の友達が私を呼び止めトイレに連れて行きました。そして窓から家の方向に指を差し、「あそこにヘリコプターが飛んでいるだろ。お前の家に飛行機が落ちたのだ、全員死んだそうだよ」と聞かされ強いショックで涙が溢れてきました。

教室に戻っても涙が止まらず、机に顔を伏せて泣き続け、昼の弁当も食べずにいると午後の授業が始まり、すぐに担任の先生が私を教室から呼び出しました。そして、事故の事実を告げられ、そのまま鶴間の市役所か病院につれていかれたのです。そこには父と長女の姉がいて、まだ状況がはっきりしていませんでしたが、数時間後には状況が分かり、病院には二男の兄と、従業員の方が瀕死の重体で運び込まれたことを知りました。

父は営業に出っていて、得意先から事故があつたことを知らされ急いで家に戻りましたが、すでに立ち入り禁止で、数人のひとに取り押さえられ、服

の上から注射をされました。

敷地内では米軍が飛行機の残骸処理にあたっており、即死した二男は腹に大きな穴が開き、長男は頭をかち割られ、従兄も焼きただれその場で亡くなりました。亡くなった3人にはシートがかけられ機体の残骸処理が優先されたのです。パイロットはパラシュートで脱出して無事でした。

一方、家の中には母と従兄の嫁、その子供がいて、玄関には東京にいたときに生まれた時から育ててきたシェパードの犬がつながれていました。

母と従兄の嫁は昼食の支度をしている時、米軍機の墜落でジェット燃料が飛び散り、家は一瞬のうちに炎に包まれ、子供を抱えて家を出るのが精いつぱいで、吠え叫ぶシェパードの犬を助けようと思いました。火の勢いが強く近所の人に制止されたのです。

二男の兄と従業員の人は作業着を燃やしながら、門の方へ弱い足取りで逃げてきて、嫁が燃え盛る作業着を剥ぎとろうとしていると、道を挟んだ反対側の工場の人が水をかけ火を消し止め、車に2

人を載せ、病院に運んでくれたのです。

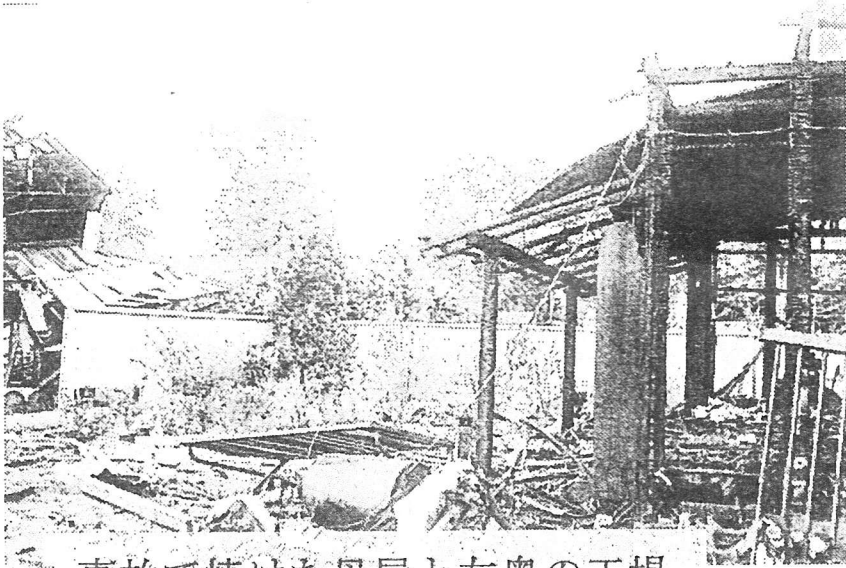
母は事故を目の当たりにし精神に強いショックを受け、その場から国立相模原病院の精神科（鉄格子がある病室）に入院させられ、事故後、数か月間病院にいました。

一方、鶴間の病院に運ばれた兄は全身に包帯をまかれ点滴姿でかすかな声で、みず、みずと言いながら、翌9日午前2時過ぎに亡くなったのです。

従業員の方は事故後数日たって亡くなったのですが、まだ意識があった時に父が耳元で米軍のジェット機が墜落してこのようなことになったと伝え、本人も理解して亡くなったようです。

事故の晩から数日間は工場の裏手にあるお寺（善徳寺）にお世話になりました。

また、二男の兄が翌朝早くに息を



事故で焼けた母屋と左奥の工場

ひきとった事を病院から知らせがあり、お寺にはすでに3つの棺が並び、そこにまた一つ兄の棺が増えたのです。

兄たちと最後の別れの時、私は兄たちの顔を見ることができませんでした。

父からあまりにも悲惨な状態で亡くなった事を聞き、ただただ棺に抱きついて涙が枯れるまで泣きました。

数日後お寺でお坊さんが経をあげて法要をしている時、私の心の中で怒りが込み上げてきて裸足で外に飛び出し、近くにいた米兵の将校に拳を何度も何度も振りかざしていたら、父たちも降りてきて司令官に向かって法要の時ぐらい頭上にジェット機を飛行させるなどしていました。

50年前といえれば東京オリンピックが開催され、日本が高度経済

成長のはしりの時でした。

父はその後、補償問題で国を相手に裁判を起こしましたが、力及ばず敗訴になり絶望のふちに落とされました。事故後十数年のちに横浜の緑区に再度米軍機の墜落事故があり、父はその現場に駆けつけていき、父を支援してくれる人々にめぐりあい、再び上告して和解と云う判決を裁判所からいただきました。

父が他界して十年が経ちますが、生前のうちに和解の判決をいただけたのも皆様方のご支援ご協力があつたからこそ得られたものと思っております。特にご尽力していただきました両家の田島様や、故 岸正幸さんに多大な裁判資金を作つて戴き、弁護士の方やそのほか多くの方のご支援ご協力に対し、心から感謝申しあげます。

そして今、五十周年慰霊の集いを開催していただき悲惨な事故の実情を述べさせてもらいました。

私はこのことを若い人々に一人でも多く知っていただき現在も抱える厚木基地の騒音問題等、諸問題解決に力をそそぎ一日も早く大和市民の方々

や基地周辺に住む住民の方が安心して平穏な日常生活が過ごせることを願っています。

そして出来ることであれば、あの地に慰霊碑が立ち、一つのモニュメントとして人々に語り継がれ、事故の恐ろしさを知っていたただきたいのです。本日はお忙しい中、多くの方々がご参加いただきありがとうございます。

(2014年11月14日)

大和生涯学習センター大ホールにて